

浦和実業学園中学校

2014年度

入学試験問題 <第1回 午前>

A 特 待 入 試

国 語

時間 50分

【受験上の注意】

1. 合図があるまでは、問題用紙を開かないでください。
2. 受験番号・氏名は問題用紙にも必ず記入してください。
3. 解答はすべて解答用紙の所定のところに記入してください。
4. 解答用紙は使いやすいように折ってもかまいません。
5. 問題用紙は回収しません。書き込みをしたり線を引いたりしてもかまいません。
6. 字数制限のある問題の場合は、句読点や符号なども一字分として字数にふくめて答えなさい。

受 験 番 号	氏 名

一 次の各問いに答えなさい。

問一 — 部のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) 中学に入り、部活にシヨゾクした。
- (2) デントウあるチームの一員である。
- (3) 多くのコンナンがあつたが、必死に努力した。
- (4) 夏休みに先輩とハカマイリに行った。
- (5) 先生が車をウンテンしてくれた。

問二 — 部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- (1) 仮病がばれてしまった。
- (2) 直ちに学校に行かなければならない。
- (3) 将来は立派な人間になろうと志した。
- (4) 率先して他人のためにつくし始めた。
- (5) 彼は気高い人だとうわさされた。

問三 各文の空らんには当てはまる「故事・ことわざ」を、後の【語群】よりそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- (1) ずいぶんと失礼な人もいたものだ。() としてよう。
- (2) () と言います。中学校でも良い友人を見つけましょう。
- (3) 道に迷ってしまったとき、わざわざ目的地まで送ってくれた人がいました。まさに () ですね。
- (4) やる気のない生徒にいくら教えても () だ。
- (5) あの二人のけんかに口を出すのは () ようなものだ。

【語群】

- ア 渡る世間に鬼はない イ のれんに腕押し ウ 朱に交われば赤くなる
エ 火に油を注ぐ オ 他山の石

問四 各文の――部をふさわしい敬語表現に直し、ひらがなで答えなさい。ただし、□二つをひらがな一字分とします。

また、拗音(小さな「ゃ」「ゅ」「ょ」)や促音(小さな「っ」)も一字分とします。

- (1) 先生に料理を食べてもらった。↓ □□□□□て
- (2) あなたに会えて光栄です。↓ □□□□□て
- (3) 社長にプレゼントを与えた。↓ □□□□た
- (4) その商品でしたこちらにあります。↓ □□□ます
- (5) せっかくですから見ていってください。↓ □□□□□て

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

【第1段落】 いまは、モノも人も、経済も情報も、国境をさまざまに行き交うようになりました。国の内から外へ、また国の外から内へ、往き来することがごく普通のことになってきた。けれども、言葉はどうだろうかと考えるのです。言葉は人の生活の日常に深く結びついています。それだけに、おたがいの日常を親しく固く結び合わせるようになればなるほど、それぞれの人にはつきりとした限界を背負わせるのも、言葉です。それぞれの国にとっての国語のように、それぞれを深く結び合わせると同時に、言葉は、それぞれにその言葉の限界を背負わずにいないのです。

① 言葉以上におたがいを非常に親しくさせるものはありません。にもかかわらず、その言葉を共有しないとき、あるいはできないとき、知らない国のまるで知らない言葉がそうであるように、言葉くらい人をはじくものもありません。際立つて親和的になれば、際立つて排他的になるのも、言葉です。

【第2段落】 けれども言葉には、もう一つの言葉があります。在り方も、はたらきも異なる、別の言葉。ないもの、ここにはないもの、どこにもないもの、誰も見たことのないもの、見えないもの、そういうものについて言うことができる言葉です。

たとえば、**1** という言葉。**1** という言葉は誰でも知っていますが、実際に、**1** というものをこれが **1** だと、**2** を指すように、**3** を指すように、これが **1** だと指すことはできません。**4** という言葉もおなじです。**4** ということを知っていても、**4** というものを、この目で見たことはないのです。

そのように、心のなかよりほか、どこにもないものについて言うことのできる言葉があります。自由。友情。敵意。憎悪。そういった言葉は、誰も見たことがないけれども、そう感じ、そう考え、そう名づけて、そう呼んできた、そういう言葉です。

国境を越える言葉、あるいは越えられる言葉ということを考えるとき、じつは国境を越える言葉というのは、このないものについて言うことのできる言葉ではないだろうかと思うのです。

国境を越えるというのは、外国の言葉をいくらか覚えるというのとは違う。ないもの、見えないもの、その言葉でしか感得できないものを、国と言葉を異にするおたがいのあいだでどんなふうにもちあえるか、ということだと思うのです。自由という言葉について思いめぐらすとき、わたしたちは自由という言葉はどこからやってきたか、考えます。自由を見た人はいない。机の上に転がっているものでもないし、公園にゆけばあるというものでもない。店で買えるものでもない。しかし、わたしたちは自由という言葉を知って、自由という言葉を通して、自由というものを感得し、そう感じられる感覚をそう呼んで、そう名づけて、その言葉を自分のものにしてきました。

そして思うことは、日本語の自由という言葉に表され、わたしたちがその言葉によって感じとることのできる感覚を、異なる国々で、違う土地で、いま、おなじように、それぞれの国の言葉、土地の言葉で、自由と呼び、自由と名づけて、おなじに感じている人びとがいるだろう、ということなのです。

そういう確信を可能にするのが、国境を越える言葉のちからであり、そのようにそれぞれの言葉を通して、おたがいを繋ぐべき大切な概念を共有することが、じつは言葉を異にするおたがいの共生を可能にしてゆくのだ、というふうに思うのです。

【第3段落】 かつておなじ時代に、おなじ思いを胸底に秘めて逝った二人の詩人がいます。

一人は日本の詩人、宮沢賢治（一八九六―一九三三）です。宮沢賢治の「鳥の北斗七星」という童話はひろく知られますが、それは敵の死骸を葬る鳥の兵士の、星への祈りの言葉で結ばれています。「ああ、（……）どうか憎むことのできない敵を殺さないでいように早くこの世界がなりますように。そのためならば、わたくしのからだなどは、何べん引き裂かれてもかまいません」

もう一人は、宮沢賢治とはほぼ同じ歳月を生き、パリで貧窮のうちに死んだベルーの詩人、セーサル・バジエツホ（一八九二―一九三八）です。バジエツホに、こういう詩があります（「群集」飯吉光夫訳）。

たたかいが終って、

戦士が死んでいた 男がひとりやって来て

言った。――「いけない死ぬのは！ きみをこんなにも愛してる！」

けれどもその屍体は ああ！ 死につづけた

バジエツホを宮沢賢治は知らなかったでしょうし、バジエツホもまた宮沢賢治を知らなかったでしょう。二人の詩人は、いずれも二十世紀の二度目の大戦の前に世を去り、いずれも世に知られるのは戦争の後になってですが、しかし、二人の詩人の言葉に遺されているのは、そのときおたがいに知る由もなかった二人の詩人が国境を越えて **X** していたと言っている、死者への深い祈りと沈黙です。

その言葉によって、感じ、考え、受けとめるほかない言葉があります。そのように言葉でしか言い表せない大事なものを、国境を越えて、わたしたちはそれぞれの言葉のうちに、おたがいにもちあうことができるということを、二人の詩人の言葉は伝えています。

【第4段落】 国境を越え、それぞれの違いを越えるのは、言葉でなくて、言葉が表す概念です。

③ 概念は音楽に似ています。それぞれの言葉という楽器によって、わたしたちにとって大切な概念を、誰にもわかって、どう演奏するか。なにより国境を越えた概念の共有が求められなければ、たやすく過つだろう。④ そう思うのです。

（長田弘『なつかしい時間』）

問一 ―部①「言葉以上に……ありません」とありますが、どういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 毎日と一緒に過ごしていることから仲間意識が生まれる一方で、過ごしていない人を敵だと感じてしまうということ。

イ 共通の言葉を使っているうちに考え方で似てくる一方で、あまりに似すぎてきて他の考え方ができなくなってくるということ。

ウ 国境の内側の人たちに同じ国民として友情を感じる一方で、国境の外側の人たちとは縁遠く感じるということ。

エ 同じ言葉を使っている者同士という一体感が生まれる一方で、使っていない人との間に壁も作ってしまうということ。

問二 1 4 のうち、2 と 3 に当てはまる語として適当なものをア/キの中から二つ選び、記号で答えなさい。ただし順番は問いません。

ア 愛 イ 印象 ウ 草花 エ 社会 オ 世界 カ 机 キ 幸せ

問三 ―部②「宮沢賢治」とありますが、この人物の作品を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 風の又三郎 イ 走れメロス ウ トロッコ エ 清兵衛と瓢箪

問四 X に当てはまる言葉を【第3段落】以外より漢字二字で探し、抜き出して答えなさい。

問五 ―部③「概念は音楽に似ています」とありますが、「似ている」とはここではどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「単語を調べる」とは、音楽でいうと楽器に問題がないか調べることである。

イ 「言葉の指す内容」とは、音楽でいうとメロディーのことである。

ウ 「楽器を変える」とは、言葉でいうと単語が変わることである。

エ 「音楽を演奏したことがない」とは、言葉を全く知らないということである。

問六 ―部④「過つ」とありますが、これについて以下の問いに答えなさい。

(1) 「過」を同じ意味で使っている熟語として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 過失 イ 過去 ウ 過大 エ 通過

(2) この「過」ちとはどういう「過」ちですか。次のようにまとめた場合、空らん^Aに当てはまる言葉を【第1段落】、【第2段落】より探し、それぞれ抜き出して答えなさい。ただし、□一つを一字分とします。

◎ 他の言語を用いている人々に対して□□^Aになってしまい、□□^Bできなくなってしまうこと。

問七 ―部「けれども、言葉はどうだろうか」とありますが、筆者はどのように結論づけていますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア どのような言葉であっても、それが言葉である限り、国境を越えていくことができる。

イ モノや人、経済や情報などとは異なり、言葉は国境を越えることはできない。

ウ 今は国境を越えることはできていないが、将来は越えていく可能性を持っている。

エ 言葉そのものというよりも、言葉の持つ概念が国境を越えることがある。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい（ただし問題の都合上、一部表記を改めたところがあります）。

【第1段落】「おれさ。実は……引きこもりだったんだよ」

田端さんには打ち明けていないことだったが、人生は、自分に年の近いこの無邪気な大学生に、正直に話してやりたい気分になった。就職浪人などと甘いことを考えている年下のイケメンに、そんなに簡単じゃねえぞと言ってやりたい気持ちもあった。

「小六のときに、親父とお袋が離婚してさ……親父って、ばあちゃんの息子なんだけど」

「『新多』ですね。おれのことだ」純平が口を挟んだので、人生は苦笑した。

「それから母ちゃん、ひとりでおれのこと育ててくれたんだけど……おれ、高校んときにひどいいじめにあつてさ。もう、何もかもいやなっちゃったわけ。で、それから引きこもり。今年の一月まで」

「ええっ」純平が、例によって大げさな反応をした。

「まじっすか。すげえ。じゃあ、もう引きこもり克服したってことじゃないっすか。すげえ。まじ、パねえ」

「まあ、そもも言えるのかな」微妙な褒められ方だな、と思いつつ、人生は応えた。

「でも、どうやって克服したんすか。何がきっかけで、外に出てきたんすか？」

問われて、一瞬口ごもった。

母ちゃんに愛想を尽かされて、捨てられたんだよ。

それで、ばあちゃんを頼ってここまで来たら、親父は死んじまつてて、ばあちゃんは認知症になっちゃった……。

急に黙りこくってしまった人生の横顔を、純平は、無遠慮に眺めていた。それから、小さくため息をついて、

「ま、言っちゃなんだけど。早々と『負け組』になっちゃったってわけっすね」

人生は、顔を上げて純平を見た。目が合うと、純平はすぐさま顔を逸らして、はきはきと言った。

「まあ、しゃーないっすよ。いじめとか引きこもりとか、ガラスの十代のときに、超ネガティブなこと経験しちゃったわけだし。都会で生き抜くための熾烈な競争から脱落するのもアリじゃないっすか？ そのほうが楽に生きられるんっしょ、きつと」

それは、最近まったく耳にしていなかった「X側」の世界に住む人間の言葉のように聞こえた。

「X側」とは、「いじめる側」だ。言い換えれば、「勝ち組」だ。そこに属する人間は、いつも高飛車で、他人に容赦がなく、自分のひと言で誰かが傷ついたり、ときには再起不能なほど追い詰められたりすることを、想像することができない。人への思いやりなどというものをかけらも持っていないのに、合理的に、計算高く生き延びる。ずる賢く、打たれ強い。そして、根拠はなくとも、いつも何かに対して勝ち誇って生きているのだ。

子供の世界ばかりでなく、いまや大人の世界にもはびこっているいじめが露呈しにくいのは、「X側」の人間がそれを周到にしかけているからだ。彼らは計算高いので、自分の点数が減点されるようなやり方ではしかない。家族にも学校にも会社にも、絶対にわからないようなやり方で、誰かを傷つけ、追い詰める。それでいて、罪悪感など微塵も持たないのだ。

人生は、純平の言葉に、とっさに「X側」の匂いを嗅いだ。無邪気な後輩に対して少しずつ開こうとしていた心の窓が、その瞬間にきしんだ音を立てて閉じられた。

無言で立ち上がると、人生は、田んぼへと早足で歩んでいった。「あれ？」と純平も立ち上がった。人生の後ろ姿に向かって、後輩は大声を放った。

「もう昼休み終わりっすかあ」

人生は返事をしなかった。その代わりに、田んぼにしゃがんで、再び苗を植え始めた。純平は、なんだよ、と小さく文

句を言っ、そのまま仰向けに横になり、目を閉じた。

(中略)

【第2段落】田植えが終了したのは、五時過ぎだった。夕日が人々の影をきちんと並んだ苗の上に長く伸ばしていた。

手に手に作業道具を提げながら、毎年参加している有志一同、和気あいあいと、畦道を談笑しながら茅葺き屋根の家へと向かう。田植えをやり切った満足感で、誰もがすがすがしく高揚している。そのいちばん後ろから、つばみ、人生、純平が歩いていった。

丸一日、体を隅々まで動かして働いたあとの心地よい疲れが、人生の四肢にも満ちていた。それでいて、気持ち晴れなかった。

昼休みのとき、何気なく純平が口にした意地の悪いひと言によって、あっけなく心の窓が閉まってしまった。言い返すでもなく、ぶん殴るでもなく、さっと心を閉ざしてしまう。こここの眠っていたいじめられっ子の自分、ちよつとした外界の刺激にたちまちひるんで引きこもろうとする自分が、まだいるのだ。純平のひと言よりも、そっちのほうに、すっかり気落ちしていた。

ふと、畦道の向こうに、田端さんとその妻らしき人影が現れた。ふたりは揃って有志一同にあいさつをしてから、人生とつばみのそばへ笑顔で歩み寄った。

「今日は純平がお世話になりました、ほんとうにありがとうございました。かえって迷惑だったかもしれんけど……」

田端さんが礼を述べると、人生とつばみは、無言で頭を下げた。

「なんだよ、わざわざふたりして」

③ 純平が、不機嫌な声を出した。

「だって、急な参加を受け入れて下さって、いろいろ教えていただいたから、きちんとお礼くらい言わなくちゃって思っ……」

そう言いわけしてから、純平の母は人生へ向かい合った。

「いつも主人から聞いています。おばあちゃんを助けてお米作りしてるんですってね。主人の勤務先でも、麻生さんはほんとによくがんばっておられるって……」

「まったく、麻生君のYの垢を煎じてこいつに飲ませてやりたいぐらいだよ」

田端さんが口を挟むと、純平は、露骨に顔を歪めた。

「で、どうだった？ 田植えは。少しは、皆さんのお役に立ったのか」

「知らねえよ」

父親の問いに、息子はぶいとそのぼを向いた。人生は、またむとした。

こいつ、せっかく親父さんとお袋さんが迎えにきてくれたのに、その態度かよ。

田端さん夫妻は、困ったような苦笑を浮かべている。ふたりとも、きつとこの我がままな息子にほとほと手を焼いているのだろう。けれど、少しでも社会経験ができるように、いろいろな人たちと交流できるように、彼が望んだ生き方をできるようにと、心を砕いているのだ。だから、あえて田植え体験などという面倒なことをさせたのだ。

人生は、純平の両親の心中を慮った。息子を大切に思うからこそ、厳しい体験をさせるべきなんだと心を決めているに違いない。そう、まるで……。

まるで、引きこもりだったおれを、突き放した母ちゃんみたいに。

人生は、むっとしかけた表情を笑顔に変えて、田端夫妻に向かって言った。

「おれらのほうは、助かりました。田植えは、手伝ってくれる人が多ければ多いほど、いいですね。今日、それがよくわかりました」

④ 田端夫妻の顔が、ほっと緩んだ。つぼみは、例のごとく、ばつかみたい、と言いたげだったが、どうにか口を結んでいる。人生は、純平のほうを振り向いた。

「つてわけで。次回も、もしよかったら、よろしく頼むわ。これからは草取りだの稲刈りだの脱穀だの、収穫の日まで結構大変なんだ」

純平は、そっぽを向いたまま、

「おれ、もう来ねえし」

と言い捨てた。田端さんが、「おい。なんだ、その態度は」とさすがに声を荒らげた。それで逆にキレたのか、純平は、もうがまんがならないという調子で文句を言い始めた。

「だってさあ。めんどくせえんだよ、この田植え。田植機も使わねーしさ。いちいち苗をつまんで地面掘って埋めて……こんな地べたを這うような仕事、そもそもおれに向いてねーんだよ。おれは、もつとこう、上昇志向なの。東証一部上場の企業とかじゃなきゃ働く気になんねーの。東京のど真ん中の、でっかいビルに本社があるような会社には、かけえスーッ着て通勤すんの。こんな泥臭い作業なんかおれには……」

と、その瞬間。

田端さんのげんこつが、いきなり純平の顔めがけて飛んだ。

ズサアッ、と派手な音を立てて、純平が畦道に後ろ向きに倒れた。うわっ！ と叫んで純平の傍らにしゃがみこんだのは人生だった。かばおうとしたわけではないが、反射的に手を差し伸べてしまったのだ。純平の母とつぼみは、声も出せずにその場に立ち尽くしている。父は、大声を張り上げた。

「お前はッ……お前は、いつから、そんな御託を並べる人間になったんだッ！ おれと母さんが、苦勞して苦勞して育てた挙げ句が、^⑤こんなくだらねえ人間を作っちゃったのかよッ！ お前の言葉はな。さっきのお前の言ったことはな。麻生君ばかりじゃねえ、農業やつてる人たち、汗水たらして働いてる全部の人たちに対する侮辱だッ！ わかってんのか、おいつ？！ あやまれ！ そこへ手エついてあやまれよッ！」

どうした、なにがあつたんだ、と有志一同が引き返してきた。人生は、ほとんど無意識に純平の上半身を支えて起こそうとした。が、純平は、その手を振り切つて、自分で立ち上がった。口もとが少し切れて、血がにじんでいる。純平の母はおろおろして、まだ声を出せずにいる。

火のような憎悪の目で、純平は父親をにらみつけた。そして、ズボンについた土を両手で払つてから、「……サイテー」とつぶやいた。

「てめえら、全部、サイテー。ぜってー、許さねーからな」

暗い声で言い捨てると、遠巻きに眺めていた有志一同のあいだをかき分けて、走つていつてしまった。

「ちよっ……待ちなさい、純平！」

ようやくひと声叫んで、純平の母が息子の後を追った。人生も思わず行きかけたが、田端さんがその肩をつかんで止めた。

「放つといてやってくれ。このくらいいしないと、あいつにはわからないんだから」

【第3段落】その日の夜、宴会の席で、田端さんは、なにごとくなかつたかのように明るくふるまっていた。

純平とその母は、あれつきり戻つてはこなかつたが、田端さんは、明日は仕事があるというのに、夜更けまで皆につき合つてくれた。

田植え作業を手伝った有志一同も、父子の確執など見なかつたかのように、陽気に田端さんに接した。^⑥近隣から手伝い

にきてくれた女性たちやつぱりとともに、人生も、もうひと働きしなければならなかつた。けれど、そうしていたほうがよかつた。田端さん父子のいさかいの引き金を自分が引いてしまったのではないかと、いたたまれない気分になりそうだったのだ。

(原田マハ『生きるばくら』)

※注 ・人生……登場人物の名前。

・新多……認知症になった人生の祖母は、純平を息子（人生から見たら父に当たる）である新多だと思ひ込んでいる。

・パねえ……「半端ではない」のくだけた表現。

問一 部A「ネガティブ」、B「御託を並べる」の意味として最も適當なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

A「ネガティブ」

ア 否定的な

イ 致命的な

ウ 精神的な

エ 圧倒的な

B「御託を並べる」

ア 誰にもわからない思いを一方的に語る

イ 正面切つてくどくどとぐちをこぼす

ウ 自分勝手な理屈をえらそうに述べる

エ 不利な状況をかわすためだけの言葉を吐く

問二——部①「純平は、無遠慮に眺めていた」とありますが、なぜですか。次のようにまとめた場合、空らんには当てはまる言葉を【第1段落】より探し、それぞれ抜き出して答えなさい。ただし、□一つを一字分とします。

◎ 他人への ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ を持っていないため、☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ を克服した人生の努力も理解せず、田舎で農業をしているのも ☐ ☐ をするために軽んじているから。

問三 X には同じ言葉が入ります。最も適当な語を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア どっち
イ こっち
ウ そっち
エ あっち

問四——部②「それでいて、気持ちが晴れなかった」とありますが、なぜですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

純平とのやりとりで自分自身に失望してしまったから。

イ
どのように純平に対して心を開けばいいのかわからなくなったから。

ウ 自分を下に見ているだろう純平と一緒に歩いているから。
いっしょ

工 このあと純平のお父さんに報告をしなくてはならないと思うと気が重いから。

問五 ― 部③「純平が、不機嫌な声を出した」とありますが、なぜですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で

答へなさい。

ア 親の監視かんしなどなくても立派に働いていけると思っていたため、プライドを傷つけられたから。

イ 人生とつばみを一緒に働いた仲間だと思っていたのに、自分の両親を歓迎かんげいしていないように感じたから。

面倒な田植えを手伝わされたうえに、両親が周囲に低姿勢でいるのが気に入らなかったから。

工 昼休みから自分を無視している人生たちに加え、両親までもが自分を軽んじているようで腹が立ったから。

問六 **Y**に入る最も適当な語を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア
肌 はだ

イ
爪 つめ

ウ
髪 かみ

エ
脚 あし

問七 ― 部④「田端夫妻の顔が、ほっと緩んだ」とありますが、なぜですか。ここまでの展開をふまえ、次のようにまとめた場合、空らんに当てはまる言葉を【第2段落】より探し、それぞれ抜き出して答えなさい。ただし、□一つを一字分とします。

◎ 田端さん夫妻は、みんなに□□^Aになるのを承知で、純平の事を思つて田植えに送り出した。人生はその親心がわかるだけに、あえて「□□^B□□□□□□」と伝えし、田端さん夫妻もその言葉を聞いて少し安心したから。

問八 — 部⑤「こんなくだらねえ人間」とありますが、どのような「人間」ですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 他人を見下してばかりで自分を支えてくれるものに気づこうともしない、取るに足りない人間。
- イ 伝統や歴史の持つ重みを見捨て人間よりも機械の方を大切にしようとする、人情の分らない人間。
- ウ 親子や友人、世間とのつながりといった人間関係の大切さに気づいていない、価値の無い人間。
- エ もうすぐ就職だというのに子供っぽい感情的な部分が抜けきれていない、精神的に未熟な人間。

問九 — 部⑥「陽気に田端さんに接した」とありますが、これはわざと「陽気に」振舞っていると考えられます。それは誰の何を思っているのでしょうか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分自身
- イ 純平
- ウ 田端さん
- エ 人生とつぐみ

問十 この文章から読み取れる「田端さん」の人物を二十〜四十字で説明しなさい。

三

点

問十

問九

問八

問七

問六

問五

問四

問三

問二

問一

40

20

受験番号				氏名		